

令和4年度阿寒摩周国立公園満喫プロジェクト地域協議会
議事概要

1. 日時：令和4年6月27日（月）15:30～17:30
2. 場所：弟子屈町川湯温泉 川湯観光ホテル コンベンションホール ラピエタ
3. 出席者：出席者名簿のとおり
4. 議事

■開会

○環境省 釧路自然環境事務所 川越所長より挨拶

- ・日頃より阿寒摩周国立公園満喫プロジェクトの推進にあたり、ご理解、ご協力をいただいていることにこの場を借りてお礼申し上げる。
- ・阿寒摩周国立公園は、2016年度から満喫プロジェクトがスタートし、様々な取組が進んできているところである。
- ・後程、取組の進捗報告もあるが、摩周エリアでは「川湯温泉街の再生」、「REVICの連携協定による取り組み」、阿寒エリアでは「カムイルミナ」「瀧口線歩道の整備」等の取組が進んできている。
- ・2021年には満喫プロジェクトの開始から5年が経過したことを踏まえてステップアッププログラム2025を策定した。阿寒摩周から自然との共生の文化を世界に発信し、国立公園の観光を通じて持続可能な社会のあり方を示していくのを基本的な考え方として据え、来年度北海道でアドベンチャートラベルワールドサミットが開催されるが、アドベンチャートラベルの推進やトレイルネットワークの推進などが重点取り組みに位置付けられている。
- ・一方、新型コロナウイルス感染症拡大の影響は、人々の暮らしすべてに及んでいる。当然、観光にも関わってきている。そういった中で様々な変化を乗り越え、対応していくためには、ステップアッププログラム2025をベースとしつつも必要な軌道修正は行う等、柔軟な対応も求められてくるのではないかと考えている。
- ・脱炭素社会の構築ということで、今、日本国全体、世界全体が動き出しているが、そういった中で地域としてもトランスフォーメーションが必要でないか、という風に考えている。
- ・本日は阿寒摩周国立公園満喫プロジェクトの関係者が一同に会する機会であり、ステップアッププログラムに基づく取組の進捗報告のみならず、日頃、皆様が考えていること、思っていること、さらには悩んでいることなども共有し、今後の取組をより良いものにしていけるような機会になればと考えている。限られた時間ではあるが本日の協議会が関係者の皆さまの連携をより強固なものとするための会議となることを願い、開会の言葉とさせていただきます。

■議題

(1) 報告事項

1. 令和4年度国立公園に関する施策および今後の方向性について（環境省）

○環境省自然環境局 国立公園課国立公園利用推進室 岡野室長より資料（令和4年度国立公園に関する施策および今後の方向性について）に基づき説明

- ・国立公園満喫プロジェクトは国立公園の保護と利用の好循環により、優れた自然を守り地域活性化を図るものであり、「受け入れ環境の磨き上げ」、「国内外へのプロモーション」に取り組んでいるところである。

→資料2ページ目

- ・利用環境の整備、体験型コンテンツの磨き上げ・受け入れ態勢の強化、景観の改善、利用者負担による保全の仕組みづくり、ビジターセンター等公共施設の民間開放、ワーケーションの推進・脱炭素化といった取り組みを全国で進めさせていただいており、それらの取り組みを民間事業者とも連携を行い国内外への発信にも取り組んでいるところである。

→資料3ページ目

- ・各地域での取り組みを制度に反映するという一方で、自然公園法の改正を行った。

→資料4ページ目

- ・ウィズ・ポストコロナへの対応、全公園への水平・垂直展開、これまでの基本的な視点の継続・重視の3つを基本方針として今後の満喫プロジェクトのさらなる推進を図っていく。

→資料5ページ目

- ・このような国立公園での取り組みは政府の政策の柱にもなっている。

→資料6、7ページ目

- ・アドベンチャートラベルが注目されており、観光コンテンツの高付加価値が重要になってくる。環境省では「コンテンツ造成」、「安全対策危機管理」、「環境への貢献・持続可能性」の3つを柱に、いくつかの視点でコンテンツ提供事業者がコンテンツをセルフチェックできるようなガイドラインを作成した。

→資料8・9ページ目

- ・環境省予算や各種補助金について説明

→資料10～14ページ目

質問なし

2. 阿寒摩周国立公園満喫プロジェクトステップアッププログラム 2025 の進捗状況について (2022 年度の取り組み) (環境省)

○環境省阿寒摩周国立公園管理事務所 笹渕所長より資料 1 に基づき説明

- ・ 取組み個票はステップアッププログラム 2025 の一部であり、各団体が 2025 年までにどのようなスケジュール感で各種取り組みを進めるかを記載いただいたものであり、進捗のあった部分は赤字で記載いただいている。
- ・ スペースの都合もあり全てを記載することは難しいが、各団体の取組みの進捗状況をまとめたのが資料 1 であり、こちらに沿ってご説明させていただく。
→資料 1 に基づき、各団体のアドベンチャートラベルの推進、ゼロカーボンパークの登録、廃屋撤去、トレイルネットワークの推進、ハード整備等の取り組みについて説明。

○北海道運輸局観光部 村上次長より「3 空港をつなぐトレイル推進」に関連して補足説明

- ・ トレイルネットワークを旅行商品として検証したいと考え、女満別空港から釧路空港まで (非動力で移動するモデルツアーの実施や課題の検証等を行った)。
- ・ 検証の結果、ガイドの方々だけではなく、地域の宿泊事業者や観光関係者を巻き込んでいくことが重要だとわかった。
- ・ 今年度は非動力ツアーを実施する際のガイドラインの作成や、ロングトレイルの有識者であるヨルダン大使を呼んでのセミナーなど、さらにステップアップさせる事業の実施を予定している。
- ・ 環境省でもトレイルネットワーク構想に関する業務を今年度実施するので、内容がかぶらないようにしつつ、連携できるところはしていきたいと考えている。

○環境省阿寒摩周国立公園管理事務所 笹渕所長よりこの後の話題提供の趣旨を説明

- ・ 1 つめの話題提供について、国立公園内各地でトレイルネットワークの推進に関連した取り組みが進んでいるが、そもそもロングトレイルとは何か? どのようなメリットがあるか? という点を中心に各地でロングトレイルの運営に携わっているトレイルブレイズハイキング研究所の長谷川代表理事にお話いただきたくお越しいただいた。
- ・ 2 つめの話題提供について、本日実施した阿寒摩周国立公園満喫プロジェクトシンポジウムのテーマでもあった持続可能な観光地づくりは満喫プロジェクトの重要な課題の 1 つと考えている。その中で昨年度環境省業務として北海道 21 世紀総合研究所様に地域で稼いだ金額がどのくらい地域内で循環しているか、どのような産業を地域で循環させることで、持続可能な地域づくりが進んでいくかの参考となるようなデータを作成していただいたので、その点を中心にお話いただきたくお越しいただいた。

(2) 話題提供

1. トレイルネットワークを推進することの意義について

○トレイルブレイズハイキング研究所 長谷川代表理事より説明

- ・アメリカにある 4000 キロを超えるトレイルを歩いた経験から日本で長く歩くことの可能性を知りたいと思い、長距離ハイカーとして活動をしている。
- ・東京の三鷹にある、ウルトラライトハイキングやロングハイキングテーマにしているハイカーズデポというアウトドアショップで商品企画や、アウトドアギアメーカーのディレクターなどもしている。ウルトラライトハイキングを世に広めた、土屋智哉オーナーの元 14 年以上勤務しており、たくさんのトレイル関係者やハイカー仲間と出会う機会を与えていただいた。
- ・ハイカーズデポで培った経験を持ってトレイルブレイズハイキング研究所を立ち上げ、ハイキング文化醸成のための活動をしている。
- ・日本でハイキングというとピクニックの延長のような言葉だが、本来ハイクという言葉は宿泊道具を持って原野を長く歩くことを意味する言葉であり、トレイルを歩くことをハイキングという。運動強度の強弱に関係なく、歩いて自然を感じながら旅することをハイキングといい、門戸が広く低いものであるといえる。
- ・歩く文化は世界に広がっている。キリスト教や数々の戦争体験、産業革命以降の自然保護思想といったものがルーツにあるため、欧米を中心に盛んであり、中でも長い距離を歩くということに注目し、ナショナルシーニックトレイルシステムというものを作ったのがアメリカである。バーモント州のロングトレイルは運営方法も併せて計画されたものとして、最古のものである。
- ・アメリカにはアパラチアトレイル、コンチネンタル・ディバイド・トレイル、パシフィック・クレスト・トレイルといった 3 大トレイルがある。私はパシフィック・クレスト・トレイルをスルーハイクしたが、3 大トレイルはいずれも半年間ほどかけて歩くものであり、3～5 日間歩いては街で補給をする。というのを繰り返して歩くものである。
- ・世界にもさまざまなロングディスタンストレイルがあるが、例えばスペインのカミーノ・デ・サンティアゴは年間 30 万人が歩きに来ている。
- ・日本には古くからある歩く文化と新たな動きがある。日本のお遍路は長距離トレイルではないものの、歩き方や地域の受け入れ方が非常に似ている。新しい動きの 1 つにトレイルがあり、全線が開通してから 3 年がたった東北にある 1,025km におよぶみちのく潮風トレイルは海外のハイカーからも注目度が高く多くのハイカーが訪れている。
- ・みちのく潮風トレイル全線を歩くと 50 日程度かかるが、広域での滞在期間が長くなるのがロングディスタンストレイルの特徴である。
- ・世界のトレイルを見てみると、すべての道が自然の道というものではない。トレイ

ルが一続きとなることを目的とし道と道（地元の山、地元の道）をつないでいるものがほとんどである。その背景にはアメリカのトレイルに地域計画としての考えがあり、街から山、街から海、街から街をつないで人と自然をつなぐものであるためである。

- ハイキングする人たちをハイカーと呼び、長距離を歩く中で1人1人が全く異なる経験をする。年齢や荷物も人によって様々で100人が旅をすれば100通りの旅が生まれる。長く歩くことでつながりそれぞれの旅を共有したハイカー達は不思議な一体感を持つ。
- ハイカーは歩いて地域を巡り、様々な人と交流するために歩く。歩く速度で色々なものを見て、聞いて、感じていく。地域の声や風土、地元の食を体験しながら地域の方と交流していく。それらとの出会いはハイカー1人1人によって違う、特別なものである。
- ロングディスタンストレイルを1回で最初から最後までスルーハイク、分割して歩くことセクションハイクという。セクションハイクを通して全て歩ききればそれもスルーハイクになる。
- スルーハイクはハイカーによっては数か月かけて歩く。広い地域に対してこれほど長期間滞在する観光客はあまりいない。ツアーバスでピンポイントに回るのに対してハイカーは地域と密接に関わりながら歩いていく。長い時間を地域で過ごすので地域住民と交流する回数や時間がとても長い。たった1人のスルーハイカーがいれば、それだけ交流人口が増えることになる。
- ハイカーはトレイル上で生活をしているので、金額は少ないが、広い範囲で買い物をを行う。歩くときにたくさんの食料は重くなるので持てないため、その分お金の糸目をつけず贅沢をするハイカーもいる。
- 長く地域に滞在することになるので、その地域に愛着を持って歩き終えるハイカーも多く、そのハイカーたちは訪れた地域のことを地元で伝える。
- 歩いた時には訪れることができなかった場所に改めて訪れるハイカーも多く、長い時間をかけて歩いた地域の記憶は強く刻まれるものである。
- ハイカーたちが歩くときに求めているのはその土地や地域のありのままの姿である。その土地の自然に触れ、地域の方のお話に耳を傾け、歩いて旅をしていくことに感動し魅力的だと感じている。
- ハイカーたちに長距離ハイキングの話を伺うと、景色の話よりも先に人との出会いの話をしてくれる。全てのハイカーが人と出会うために歩くわけではないが、旅の中で人と出会うのは全てのハイカーにとって大きな出来事になる。ハイカーを受け入れる地域の方々には、ぜひありのままにいていただけたらと思う。
- 自然の中のトレイルは人が沢山歩くほど歩きやすくなる。ぜひ地域の方も身近にあるトレイルを歩いていただければと思う。皆さんが普段何気なく歩いている道も

- トレイルとして利用されているかもしれません。
- トレイルを歩いているときに、地域の方に何げなく話しかけられるだけでもハイカーはその地域の虜になる。
 - トレイルは短いといけないというわけではないが、これまであまり日本のトレイルに興味のなかった海外のハイカー達も、みちのく潮風トレイルの 1,000km という距離に反応した。1,000km という数字がハイカー達を刺激し、メディアからの注目度も高いといえる。
 - 数日先のことは予測可能であり、変化しない自分も想像がつくが、長い距離の中にあるのは想像しがたい予測できない時間である。距離が長く、歩く期間が長いほどに多くの人と出会う機会ができるため魅力があり、長く繋がっていることに意味がある。
 - ハイカー達はその長い距離を、市境、町境、村境といった自然にはない境界を無関係に歩き、シームレスに流れて交わっていく旅をする。この新しい流れは少しずつだが文化になっていくと思う。
 - ロングディスタンストレイルには多くの時間をかけて生まれた文化がある。アメリカにはハイキングにまつわる数々の言葉がある。例えばハイキングをサポートする人をトレイルエンジェル。トレイルに沿った街をトレイルタウンという。それらも含めてハイキングカルチャーというが、ハイキングはまさに文化であり、その新しい文化が日本にも生まれつつあると感じている。
 - 長い時間、長い距離を歩き続け、ハイキングを生活の場とした先に、離れた別の社会が今まで以上にはっきり見えてきた。自分がハイキングを続けられるのは、今こうしているときにも社会活動をし続けている人たちがいるから。誰かが食べ物を作ってくれているから。人は1人では生きていけないということを体感として得たため、多くの人に長距離ハイキングを経験してほしい。
 - トレイルに関わる地元の人、整備をする人といった方々にも地元でトレイルがあるということに誇りをもって欲しい。トレイルに関する活動を続けていくことでただの海外の真似ではない日本での文化が育まれていく。時を重ねるごとに地元の誇りになり、力になり子ども達にとっても長く歩く道があることが、その地域で生きてきた誇りになる。いつか未来を歩くハイカー達が日本の誇りに思えるようなトレイルが日本にあると嬉しい。
 - 地元とハイカーが一体となってトレイルを活用し、交流し繋がっていく先に日本の文化として長く歩く旅が根付いたこの国を見たい。そこには今の僕らが想像もできない、今よりは少し面白い、そしてちょっとだけ今よりも平和な未来があるかもしれない。この平和へと続く可能性があるということがハイキングの長く歩く旅の持つ魅力なのだと思う。
 - トレイルというのは広域に連携して地域全体で取り組んでいかなければならない

もの。ぜひ皆さまのお力を合わせて取り組んでいただき、素晴らしい道東エリアを歩く速さで体験でき、地域を感じて知る道になっていくことを願っている。

2. 阿寒摩周国立公園における持続可能な観光と目指すべき方向性について

○株式会社 北海道 21 世紀総合研究所 調査研究部 三上専任研究員より資料 2 に基づき説明

- ・現在、環境省業務として受託している「阿寒摩周国立公園における持続可能な観光地づくりに関する検討業務」で実施した経済分析調査から地域経済循環分析を中心としてお話をさせていただく。
- ・先ほどの満喫プロジェクトシンポジウムでこれからは経済的な豊かさよりも心の豊かさという話題があったが、心が豊かになる観光地を提供し続けていくためには観光地側にも経済的なバックボーンが必要だろうという視点で説明を聞いていただければと思う。
- ・この調査は「持続可能な観光地づくりを推進する上で、前提となる地域経済循環の現状を把握する」、「持続可能な観光地づくりを推進するために取り組むべき方向性を整理」の 2 つが大きな目的である。本日は阿寒摩周地域の経済構造、地域経済循環の現状と課題についてお話しさせていただく。

→資料 2、3 ページ目

- ・産業連関表とは、一定地域において 1 年間に行われた財・サービスの産業間の取引、産業と家計などの最終消費者との取引、他地域との取引等の関係を一つの表にまとめたもの。全国表、都道府県表、市町村表が国内では作成されているが、市町村表は政令指定都市のほとんどが作成しているもののそのほかの市町村表はまだ少ない。

→資料 4～6 ページ目

- ・今回の業務では新型コロナウイルス感染症の影響を受ける前である令和元年のデータを基に、弟子屈町と釧路市阿寒町地区を対象に産業連関表を作成し、それらを合わせて阿寒摩周地域の産業連関表を作成した。（主に使用したデータは経済センサスおよび各事業者へのアンケートにより収集した。）

→資料 7 ページ目

- ・阿寒摩周地域の域内生産額は 753 億円、その内訳は粗付加価値部門計（全体で生み出された付加価値額の合計）が 416 億円、内生部門（原材料やエネルギー等に使用された金額）337 億。表を横に見ていくと、輸移入が 493 億円、輸移出が 458 億円となっている。

→資料 8 ページ目

- ・35 部門の表で見ると弟子屈町の生産額合計は約 433 億円、阿寒町は約 320 億円となっている。弟子屈町では、畜産、建設、公務が大きく、阿寒町は宿泊業、畜

産が大きいという特徴がある。畜産、宿泊業、建設が阿寒摩周地域の主要産業であるといえる。票の右側の備考欄には観光関係としての色合いが強いと思われる業種に具体的な業種を記載しており、それらの業種を合計したものが表下部の観光関連分野である。それぞれの生産額のうち観光関連分野が占める割合は弟子屈町が9.2%、阿寒町が29.2パーセントである。

→資料9 ページ目

- ・産業連関表をわかりやすくまとめた図をみると、地域内産業の生産額は753億円であり、畜産業、宿泊業、建設業は100億円を超える。非常に大きな業種になっている。生産額の内訳は、地域内の需要と外に対して売り上げをあげているところの2つに分けることができる。地域外への輸移出額が大きいのは畜産や宿泊業、建設業があげられる。地域内の需要が全部で787億円あり、そのうち294億円が地域内産業により供給されているため地域内自給率は37.4%である。787億円から294億円を引いた493億円を他の地域から輸移入していることとなる。他の地域からの輸移入に依存している分野として商業、建設業、その他食料品などがあげられる。地域内の生産額753億円のうち416億円が付加価値だが、この数値を用いて住民1人あたりの付加価値額を平均すると、全国平均よりも低い値となるが所得が低いというよりも産業構造の違いによるものをご理解いただきたい。

→資料10 ページ目

- ・産業連関表を基に弟子屈町、阿寒町のそれぞれの経済構造を見てみると、弟子屈町の自給率は39.4%であり、町外からの輸移入学285億円から町外への輸移出額248億円を引くと域際収支が-37億円となる。阿寒町の自給率は30.8%、域際収支は-11億円である。域際収支を単純に合計すると-48億円になるが、弟子屈町と阿寒町での取引があるため、阿寒摩周としての域際収支は10ページ目の35億円となる。

→資料11.12 ページ目

- ・阿寒摩周地域で所得を生み出している産業ということで付加価値額が高い業種に着目した。一番大きいのは建設、次いで宿泊業、畜産、不動産、公務、商業となっている。

→資料13 ページ目

- ・地域で生み出した所得のうち、地域にとどまり、活かされている割合を見てみると、付加価値額の合計416億円のうち、地域外から当地域に通勤している人の所得25億円と地域外の本社等の経費分49億円が地域外に流出しており、地域に残った付加価値額は343億円となる。全消費支出の52%にあたる145億円が地域外で消費され、民間投資額の21%にあたる6億円が地域外投資となるため、地域内にとどまった付加価値額は192億円となり、地域で生み出した所得のうち、地位kにとどまり、生かされている割合は46.1%（192/416億円）ということがわかる。

→資料14.15 ページ目

- ・畜産業では、高齢化問題、後継者問題を抱えているほか、観光関連産業では、新型コロナウイルスによる低迷からの早期回復、建設業では、高齢化問題のほか、公共事業の停滞など、本地域のリーディング産業を取り巻く環境は厳しい。今後は観光客の復興、新たな観光振興の取り組みや、地域内の経済循環を高めるための仕組みが重要となってくる。

→資料 16 ページ目

質疑応答

○環境省 釧路自然環境事務所 川越所長より質問

- ・課題として、「リーディング産業に対して、その他の産業の格差が大きいため、地域で生み出された所得が、十分に地域に回っていない状況となっている。」とあるが、これはリーディング産業に地域が頼っているため、地域でマイナスが生まれてしまっているという理解で良いか？また、そのことへの対応としては、リーディング産業が引っ張っていくべきなのか、他の産業が押し上げていくべきなのか、補足説明をいただきたい。

○回答

- ・リーディング産業が引っ張っていくというよりは観光業のようなお金を落としてもらう産業を大きく育てていくことが必要となってくる。リーディング産業が引っ張っていく形が良いが昨今の情勢も非常に厳しい。一方で畜産等のように北海道の 1 次産業の持つ役割というのはより日本の中でも重要なものになると考えられ、1 次産業と観光が地域を引っ張っていくことも考えられる。

○釧路市 秋里副市長より質問

- ・持続的な観光地づくりを続けていく上で経済分析というのは非常に重要だと感じた。釧路市でも各種産業の形態の中でこのような分析を行っており、本日のプレゼンを聞いて、地域内での消費の少なさ等、釧路市街地と共通した課題があると感じた。地域経済を継続させていく上で、地元の食材などのものは当然だが、人材や金融も含めて地元で融通していくことが重要であるという理解でよろしいでしょうか。

○回答

- ・おっしゃるとおりです。

(3) 意見交換

○環境省 釧路自然環境事務所 川越所長より説明

- ・満喫プロジェクトも 8 年目を迎え、ステップアッププログラム 2025 がスタートし様々な取組が進んでいるということを冒頭でもお話させていただいたところであるが、今後さらにより良いものにするために変更等が必要な際は柔軟に対応していき

たいと考えている。本日は皆様にお集まりいただいた貴重な機会なので、ざっくばらんに意見交換ができればと思う。皆様からご意見をいただきたいと考えているが、まずは自治体の皆様から順番にご意見をいただきたいと思う。

○釧路市 秋里副市長より

- ・釧路市の阿寒町エリアの方でも「阿寒湖畔滝口線道路」の整備を環境省に進めていただいたところである。遊歩道の整備をしていただくということは、大事な森林、大事な湖を理解する場が出来たということであり、非常に感謝をしている。
- ・ゼロカーボンパークの取り組みが進んでおり、我々釧路市も登録を承認いただいているところであるが、脱プラスチックやマイボトルの推進等登録後の取り組みが大事になってくると考えているところである。
- ・来年 ATWS が北海道でリアル開催されるため、ゼロカーボンパークを始め、阿寒摩周国立公園満喫プロジェクトの取り組みを進めていきたい。

○弟子屈町 徳永町長より

- ・満喫プロジェクト対象 8 公園のうち 1 つに阿寒摩周国立公園が選定され、様々な取り組みが進められてきた。特に本町では廃屋撤去をはじめ様々なことが現実になったことに対してお礼申し上げたい。
- ・泥まみれになりながら温泉川の清掃や、手作業での建物の修景（ペンキ塗り等）も環境職員と町職員、そして地域関係者が力を合わせて実施することができた
- ・東北道には多くの自然公園や食材があり非常にポテンシャルが高く広域的な観光を進めていくことが重要になってくると考えている。様々な地域でそれぞれがステップアップしていきたい。

○美幌町 平野町長より

- ・満喫プロジェクトが 8 年目を迎えたが、美幌町が関われるということに感謝したい。私は小さいころから道東にいるが、阿寒摩周国立公園というのは小学校の修学旅行等でも訪れており、若いころはよく屈斜路湖でカヌーをしていた。清里町の神の子池も国立公園に加わるなど、私の大好きな地区がどんどん良くなることを嬉しく思う。
- ・現在、屈斜路カルデラ外輪山トレイルを大空町、津別町、美幌町の 3 町で取り組みを進めている。美幌に住んでいる青年達や、これからこのトレイルでガイド等の仕事として関われる環境、そしてそれらを中心とした人のつながりが広がっていくことを嬉しく思い、津別町長、大空町長とも 3 町でしっかり協力して皆様に訪れていただける環境を作らなくてはいけないということをよくお話している。

○津別町 佐藤町長よりご意見

- ・ステップアッププログラムの取組個票にもあるように、津別峠展望施設のスペースを拡張していきたいと考えているところである。津別峠自体は津別町にあるが、屈斜路湖や知床の山並み等の景色を借りて見させていただいている。
- ・移住してきた方で雲海を活用し、良いツアーに作り上げた方もいるが、雲海を見に行く方が空振りの少ないように出来ないか考えていたところ、北見工業大学と高感度カメラを設置し、雲海の発生する条件を研究することとなった。研究が進めば見に行くと空振りになることが少なくなると思っている。美幌町や弟子屈町といった、同じく屈斜路湖の雲海を見ることのできる町と、研究の結果は共有していきたい。
- ・津別峠なども出来ることなら国立公園に編入させていただきたい、津別町としても、森林セラピー基地の認証やネイチャーセンターの整備等の取組を進めてきたところなので、皆様と一緒に色々な取組を出来る環境が醸成されているところと考えているので、国立公園への編入についてもお力添えをいただければありがたい。

○清里町 榊引町長より

- ・阿寒摩周国立公園へと名称が変更された際に、神の子池も国立公園の区域に入った。神の子池は摩周湖から抜け出た水の受け口となっているという説もあり、季節や天候によって様々な色を見せるが素晴らしい青色をしている。
- ・先ほど議題の中でロングトレイルがあったが、清里町内の裏摩周展望台から上手くトレイルを組めないかと考えている。裏摩周展望台から神の子池に降りるトレイルがあるが、摩周湖の外輪山を使ったトレイルとして、西別岳登山道から裏摩周展望台までをトレイルでつなぐ方法はないかと考えている。そうすると、神の子池から摩周湖第一展望台までトレイルルートが繋がる。
- ・ロングトレイル構想が進んでいくことで、11市町が一つの地域として繋がっていけるような体制が出来ると良いと思っている。今は北海道の世界自然遺産は知床しかないが、道東には国立公園や国定公園、道立自然公園がとてたくさんあるので、世界自然遺産へと繋げられる取り組みを行えるとより良いと考えている。

○標茶町 佐藤町長より

- ・西別岳が標茶町のエリアとなっており、国立公園として関われる部分は多くないと思っていたが、西別岳の登山道には自然の花がとてたくさんあり、登山道として有名でファンも多く、山岳会の方やボランティアの方の協力も得ながら町で山小屋とトイレを設置しており、登山道についても傷んだ際には修復をおこ

なっている。外来種が多くなってきているが、皆様のお力も借りながら問題を解決していきたいと考えている。

- ・阿寒摩周国立公園の皆さまの様々な取り組みを見させていただいているところであるが、標茶町は釧路湿原の43%を占めている町でもあるので、そちらの方でも取り組みを進められないかと考えているところであり、環境省上質化補助事業を活用し湿原の中にある宿泊施設の再生を行っている。

○足寄町 丸山町長より

- ・足寄町のオンネトー地区では阿寒摩周国立公園満喫プロジェクトの取組の一環としてオンネトー野営場休憩舎（通称：UPI オンネトー）をオープンした。アンプラージュインターナショナル（通称UPI）に管理運営を委託しており、アウトドアグッズの販売やワークショップの開催、雌阿寒岳オンネトーエリアの観光・環境保全・防災の拠点等といった、ここでしか出来ない体験を提供できる持続可能な観光地づくりを進めていきたいと考えている。
- ・課題としては、同じ阿寒摩周国立にある阿寒湖や摩周湖などと比べ知名度も高くないことや、町の中心分から遠く宿泊施設が少ないことなどがあげられるが、食やイベントを組み合わせた滞在型観光を地域一体なりPRすることで、観光客を取り込みたい。
- ・今後、国立公園の玄関口の足寄町として、雌阿寒岳オンネトーの魅力の磨き上げ、ソフトの充実、情報発信などを積極的に進めていきたいと考えている。

○阿寒摩周国立公園管理事務所 笹渕所長より

- ・6月末で転勤することとなったが、着任してから4年間、阿寒摩周国立公園満喫プロジェクトの中で色々な取り組みをさせていただいたところであるが、本日も色々と皆様からご発言いただく中で環境省への感謝の言葉もいただき非常にありがたい気持ちである。
- ・阿寒摩周国立公園や関わる地域がより良くなるように色々と取組んできたところだが、環境省だけが取組むのではなく地域の皆さまも一緒になって4年間様々な取組を進めていただいたと思っている。阿寒摩周国立には11の市町があるが、自治体の枠を超えた連携もあったことも取組が進んだ要因だと考えている。
- ・本日の皆さまからのご発言でも前向きな発言が多くあり、是非我々も一緒に取り組んでいきたいと考えているので、皆さまのお力を借りながら阿寒摩周国立公園をより良いものにしていきたい。

■閉会

○環境省釧路自然環境事務所 川越所長より挨拶